柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
https://kakio-kyoudo.jpn.org/
第 204 号

古老は語る
宮野薫さんのお話 10

岡上の人々と戦後の暮らし（その 4）

（聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員)）

＊西町会にあったスナック「川路」にまつわる話。かなりな社交場だった。そこのママが私の女房と同い年で誕生日も近く、あれこれ行き来していた。そこのマスターが昭和 4 年生まれで自分（薫さん）と同い年だった。地元岡上の人ではなく、戦時中、大連あたりにいて引き揚げて来た人だった。昭和 60 年ごろまで営業していたと思う。

「川路」にはよく寄った。和光大学が開学したのが昭和 41 年で、その頃お店はまだ盛んにやっていた。ダンスホールみたいな感じでもやっていたな。「川路」のママがなんでもできる人で、歌も上手だし、踊りも上手、愛想のいい人だった。お店のない岡上の唯一の場所だった。

写真が「川路」のママ。本田さん。クリスマスパーティーの写真。お店の中の写真。ダンス、フラメンコもやったりね。

柿生小学校の PTA 会長をやってた時に校長の内藤先生に「岡上にこんな店がありますよ」と伝えたら、行ってみようということになって校長先生が「川路」にやって来ましてね、あの頃、森昌子の「せんせい」っていう歌が流行っていて校長先生がそれを歌っていましたよ。まず面白い。今じゃあ考えられないようなことです。だから、柿生小学校の先生たちも地元の柿生で飲むよりも「川路」で飲む方が面白いって言ってやって来た。

昔、柿生で集まりか何かがあって、私と山田篤司さん、梶正雄さんと「川路」に寄ったのが、昭和 45 年 11 月 25 日。三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊東部方面総監部で自決した日に飲んでいて、梶さんが「死んだらお終いだから」「三島由紀夫もバカだなぁ」と言ったら、熱血漢の山田さんが「バカとはなんだぁ」なんて怒り出しちゃって、ママが「まあまあ」と宥めに入って、それから飲み直したこともあった。二人の性格がよく出た「川路」での一件でした。

私の父が「敬老会に行ってもいつも同じような踊りでつまらない」と云ったのを聞いた女房が、よしそれならと「川路」のママに相談したところ、当時ヒットしていた三沢あけみの「島のブルース」をやったらということになりました。振付や衣装もママの指導で友人 5 人が岡上山東光院本堂で開かれた敬老会に初出演したところ、老人達に大受けしその後、岡上小学校の開校祝賀会でも披露しましたら、また大受けでした。永田校長が「私の故郷は奄美大島なのでとても良かった」と喜んでくれたのを覚えています。

その後、川崎市内の農協の女性部大会に出演したところ、これまた大喝采で翌日、農協女性部担当の村岡さんが家に見えて「宮野さん良かったわ!　ありがとう」と感謝の礼を云われたのが昨日のことのようです。しかし、すでに 3 人は亡くなり残る 2 人も 93 才、96 才と高齢になり、只一人歌手の三沢あけみだけは元気で活躍して居り、テレビで見ると今昔の感ひとしおです。地域にあって社交と憩いの場であった「川路」も今はありません。

・「川路」は鶴川駅から川井田方面に向かい、通称「岡上和光通り」のゆるい登り道の途中、左側にあった。南口のない時代の鶴川駅から徒歩で 10 数分の距離である。
・森昌子「せんせい」は 1971（昭和 46）年 7 月の発売。「Wikipedia」には「ヒットチャート在位中の売上げ枚数は 51.4 万枚」とある。校長先生が「せんせい」を歌ったのが、ヒットの年か、その直後だったとすると 1966 年に岡上分校が閉校した後、岡上小が開校するまで岡上の子供たちが柿生小へ電車通学をしていた時期にあたる。宮野薫さんが柿生小の PTA 会長だったのは「1972 年度」（『柿生の教育のあゆみ』）であった。岡上小は 1987 年 4 月 1 日に開校。その年の児童数 371 名。薫さんの言葉にある「永田校長」は初代校長の永田早美先生。
・「島のブルース」は 1963 年 4 月発売の三沢あけみ&和田弘とマヒナスターズによるヒット曲。「♪奄美なちかしゃ　蘇鉄の影で／泣けばゆれます　サネン花(ばな)ヨ～」。「なちかしゃ」は「懐かしや」の意。
・東光院に託児所があったことや境内が子どもの遊び場だったことは前号（203 号）の記事で触れたが、流行歌と踊りとが余興で入る賑やかな敬老会が開かれていたというのは、お寺が地域の交流の拠点の一つだったことをよく表している。　（続く）

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 14

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(14)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

禅寺丸柿をとりあげた果樹園芸本を探す(２)

前回に引き続き、今回も近代に出版された果樹園芸本の中から禅寺丸柿について記述している本を紹介する。

③ 富樫常治(とがしつねじ)著『増訂實験果樹栽培講義』(養賢堂　大正 14 年初版、昭和 13 年第 15 版)の第６章「柿」の項で総説、来歴及び現況、栽培の目的と経営上の顧慮、風土、品種、苗木の養成及び栽植、柿の性態と結果の習性、整枝法、剪定法、肥料、摘果・袋覆其他管理一般、採収及び荷造、加工法、病虫害、収支計算をとりあげた実践向きの本である。品種の項では、甘柿の有望品種として富有・花御所・次郎柿・久保・正月・水島とともに禅寺丸柿をとりあげて、次のように説明している。

富樫常治(『神奈川県農業試験場六拾年史』より)

本品種は神奈川県産で樹勢は強健で、枝梢の分岐が多い。果実は円形、頂端は平らで果頂に黒条の黒点を生ずる。果皮は最初朱黄色で、次第に朱赤色となる。種核が多い。甘味が多く品質が濃厚である。本品種は９月下旬より収穫できる。樹齢が若い時は、渋く不良なる欠点がある。

本書は『實験蔬菜栽培講義』の姉妹編として出版されたもので、果樹栽培家や農学校の卒業生等専門学校の参考書として適切な本だと推奨している。

著者の富樫常治は、愛知県の枇杷島(びわじま)市場(現・愛知県清須市)の青物果実問屋の村瀬儀兵衛(ぎひょうえ)とはかねてから懇意にしていた間柄で、村瀬が禅寺柿丸柿の取引を希望していたことを実現に向け動いた人である。これをうけて神奈川県農会は慎重に調査し、都筑郡農会に対して枇杷島市場に売り出すことは問題なしと判断した(『神奈川県農会報第五拾六号』明治 43 年)。まさに栽培農家にとっては、禅寺丸柿の枇杷島市場への販路拡大につながった。そこで、販路拡大の恩人である富樫常治の履歴を次に簡単に紹介しておくこととする。

富樫常治の履歴については、本人自らが自著『神奈川県園芸発達史』(養賢堂、昭和 18 年)の巻末に「小歴」を掲載している。この他、『神奈川縣名鑑』(横濱貿易新報社出版部　昭和 10 年)に、本人の顔写真入りで簡略に履歴を掲載しているが、ここでは本人が記した「小歴」に依拠して記しておく。

「小歴」によれば、明治 10 年(1877) 2 月 14 日に山形県飽海(あくみ)郡北平田村曽根田(現・山形県酒田市)という戸数僅かに十数戸の小さな村で誕生した。村は庄内平野にあり庄内米の産地として知られていた。小学校初等科は村内で学んだ。しかし高等科は村内になかったため、約 12km 離れた豊田という家に寄宿した。武士道を重んじた豊田から、精神的にも厳格に鍛えあげられたと語っている。同 27 年には山形中学に入学した。その後同 33 年に東京帝国大学農科を卒業した。卒業後一時帰郷したが、同年９月に北海道に渡り、さらに 12 月には札幌二十五連隊に一年志願兵として入隊した。同 34 年に除隊した。同 35 年に神奈川県農事試験場に技手として就職した。同 36 年に結婚した。同 37 年２月６日に日露戦争勃発により応召(おうしょう)され、２年間戦地を転戦した。同 38 年の年末に横浜に帰り農事試験場に復職した。同 42 年に家族とともに神奈川県中郡吾妻村二宮に転居した。ここで農事試験場二宮園芸部の新設に尽力した。同 40 年に試験場技師に昇任した。大正５年(1916)に神奈川県技師を命じられた。昭和３年(1928)には、県内の園芸家・知人から長く神奈川県に在住して園芸の指導をしてくれるよう切望され、先生に新築の住宅を寄付した。同９年１月 20 日に神奈川県農事試験場長に昇任し、同 17 年９月 30 日に退職するまで場長として活躍された。退職後は横浜植木株式会社に就職された。著書は、今回紹介した他に『果樹園藝』等がある。昭和 31 年(1956) 5 月 16 日没。享年 79。　（続く）

シリーズ
歴史の中の女性像

その 1　ナイチンゲールの世界（20）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

看護士の養成

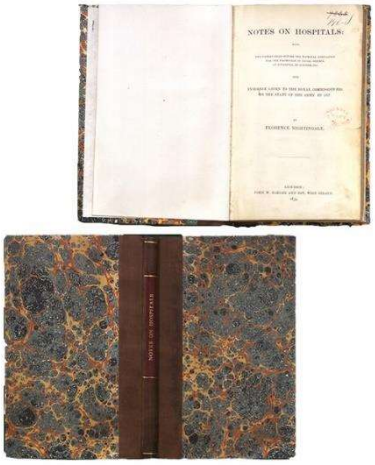
新聞記者たちがフローレンスに会えるはずはなかったのです。死後にプルセラ病と判明した宿痾に悩まされながら、劣悪な環境に置かれた兵士や貧しい市民の病死を少しでも減らしたい願いから、兵士や一般市民の居住環境の改善に取り組み、軍や政府にも精力的に働きかけてきた彼女の健康は、１日の大部分をベッドに横たわった状態で過ごさざるをえないところまで悪化していたのです。フローレンスの強靭な精神力をもってしても、病には勝てなかったのです。それでもフローレンスはベッドで出来る仕事はやめようとしませんでした。彼女は手紙で会話を続け、必要と考える執筆活動も続けていたのです。フローレンスには、なおしなければならないと思い定めた仕事が残されていたのです。

それは、看護の知識をしっかり身に着けた質の良い看護士を養成する事、そのための学校と学習プログラム（＝カリキュラム）を練り上げること、そして質の良い病院建築のプランを完成させることでした。彼女は建築も勉強していたのです。いくら病院施設の環境を改善しても、入院患者を看護する人材が不足していたのでは、病死者を減らすことは出来ません。フローレンスが看護士養成学校を設立し運営する仕事に携わる志を持っていることは、広く知られていましたから、クリミア戦争の戦局が一段落した頃から、イギリス本国の社交界が中心となって、帰国したフローレンスに看護士養成学校の設立資金を提供しようと、「ナイチンゲール基金」が設けられて寄付金集めが始まっていたのです。この時フローレンスが、基金の委員全員に、「皆様のお心使いは大変有難いのですが、私が看護士養成の仕事に取り掛かるのは、かなり先のことになると思います。いつのことになるかはまだ分かりません。私には、先にしなければならない仕事が残されているのです。」と記した手紙を送ったことは、第 14 回に記しました。フローレンスが実際に看護学校の教壇に立つ願いはかなわぬことになったのですが、彼女が理想とするカリキュラムを整え、教科書を編纂し、必要な役職を含む学校組織図まで指示した看護学校が、1860 年代にイギリス各地に次々に誕生していったのです。

最初の看護士養成学校は、「ナイチンゲール基金」に届けられた 45,000 ポンドの募金によって、1860 年に聖トーマス病院㊟ 内に創立されたナイチンゲール看護学校です。校長には病院の婦長が就任しました。学校の創立に間に合わせようと、フローレンスは大急ぎで『看護覚え書』（初版 1859 年）を出版しました。誕生間近な看護学校の教科書にと考えての著作でした。そのためフローレンスにしては珍しく、この初版には大切な点で書き漏らしがありました。気付いた彼女は、大急ぎで 40 ページに及ぶ補章「看護とは何か」を加筆した第 2 版を、翌 60 年 7 月に発行しました。この第 2 版を底本とした翻訳が、現在も各地の看護学校や看護士たちに読み継がれている看護士のバイブルとされる書物なのです。

この書は、日本を含む世界中の看護士養成施設で、今も教科書として使われる必読文献です。

フローレンスは病院建築の鏡と称された図面入りの『病院覚え書』（1863 年発行の第 3 版が底本）も 1861 年に出版しました。現在では高度の医療は大病院で行われるため、重傷患者が自宅で療養するケースは例外中の例外なのですが、19 世紀は全く違っていたのです。医師は患者宅を訪問して診療し、患者は自宅で療養するのが当然と考えられていたのです。病院は自宅で療養出来ない貧しき人々を収容する施設と考えられていたのです。そんな施設をフローレンスは患者の疾病を治し、社会復帰させるために必要な最低限の条件を備えた空間に作り替えようとしたのです。『病院覚え書』の冒頭には、「病院が備えるべき第一の必要条件は、病人に害を与えないことである。」という有名な一文が記されています。



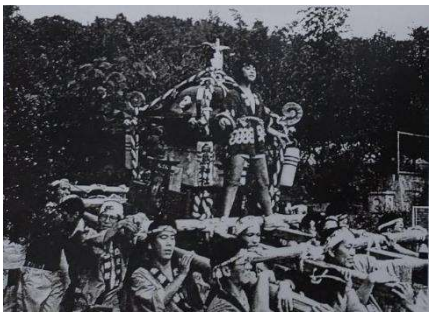
『病院覚え書』Notes on Hospitals
1863 年発行の第 3 版

（注）聖トーマス病院、現キングス・カレッジ・ロンドンは、ロンドン大学を構成する 6 つのカレッジの中で最大規模を誇っている。なかでも、フローレンス・ナイチンゲール看護・助産・緩和ケア学部は、最も学生数の多い人気学部で、英国内の看護学専門コースで唯一大学院を備えています。

（続く）

白鳥神社と神輿の今昔 その２　「青友会」～「神輿友の会」

柿生郷土史料館支援委員会副委員長 鈴木正視



大人神輿の様子

小田急多摩線の工事とその沿線周辺の宅地造成が始まり、その間神輿の渡御は中止になった。昭和 50 年(1975 年)多摩線は小田急多摩センターまで開通、白鳥神社の周辺も宅地造成され、道路が細く急坂であったところは、なだらかになった。

「青友会」の人達は新たな神輿の渡御を考えていた。例大祭にはぜひ神輿を出したい。それも片平、五力田の地域を広く練り歩きたい。そこで目的としてまず「五穀豊穣を願い」、「日本古来の伝統、行事を中心に地域住民の一層の親睦と融和を図り、子供達に日々の思い出を残し、古来の風習に触れる機会を通して人間形成を図りたい」と熱く語って、崇敬会会長や神社の役員の了解を得た。

次に町内会、会長、役員、長老宅を訪問、神輿を出して広く回るためには休憩所（御旅所）が必要になる、町内会で何とかできないかと、目的を話して協力を要請して回った。その結果、御旅所、休憩所を６か所作ってもらえることになった。

最後に担ぎ手である。多摩線工事前に担いだ人、そして新たに担ぎ手探しを若い人が居る家を訪問し誘った。

例大祭は９月 26 日、いよいよ宮出しの日が来た。担ぎ手も決まり神輿が神社の境内を３回廻り階段をゆっくり下り鳥居をくぐり道路へ。「ワッショイ」「ワッショイ」と威勢のいい掛け声、同時に回りにいた見学の人達から大きな拍手。〔ワッショイの語源は「和し背負へ」という言葉とか。〕神輿を宮出しするより先に、先導者（崇敬会役員）、続いて金棒引き（子供会の女子４名、道中長いので交替する）、次は引き太鼓（４才以上で小学生）、次に子供神輿（小学生高学年以上）、そして大人神輿（中学生以上の一般男女）の大行列である。

当時の順路と時間は、神社 11:00 出発→栗平駅前（東京相銀栗平支店、休憩 10 分）→栗木交差点＜上麻生蓮光寺線＞→並木建材店前 11:50 着御旅所、12:30 出発→柿生西高入口→泰平建設前着 13:00 御旅所、出発 13:30→寺台入口駐車場着 14:00 御旅所、出発 14:30→柿生小学校前を通り柿生信号左世田谷町田線片側通行止め、ここからどういうわけか担ぎ手が増えた。→修広寺入口駐車場着 15:20 御旅所、出発 15:40→五力田三叉路着 16:00 御旅所、出発 16:20→白鳥中学校を横に見ながら神社へ、17:00 神輿の宮入である。御旅所とは休憩しながら振舞酒を呑んだり、食べ物（御握りやお菓し）又ジュースお茶を飲める場所。

休憩含め６時間の神輿の渡御も無事終り境内では祝宴となった。

現在は神輿のコースも４通りとなり時間も短く「青友会」から「神輿友の会」になり存続している。

柿生郷土史料館 第 99 回カルチャーセミナー

麻生区の今昔を辿る記念映画　上映と撮影秘話

『あさお誕生物語』　制作秘話と鑑賞

～語り継ぎたい 60 年のあゆみ～

講師：芦澤浩明氏
（日本映画大学）

日時：6 月 7 日(土)
13 時 00 分～14 時 30 分

会場：柿生中学校 武道場

参加費：無料　どなたでも参加できます。

『あさお誕生物語』は、昨年川崎市制 100 周年記念事業の一環として、麻生区役所と日本映画大学の共同で制作された 30 分強のドキュメンタリー映画です。麻生の地がどのような変遷を経て、現在のような姿になったのか。区役所からの依頼を受け、過去の記録や伝聞を調査し、記録しながらシナリオ作りや古い映像の再現、そして古老たちへの出演交渉などを手掛けられた日本映画大学総務部の芦澤浩明氏に制作上の苦心談などを伺い、34 分程のドキュメンタリーを映写していただきます。

街づくりに苦心された功労者たちへのインタビューや調査で区役所の倉庫や図書館の書庫から探し出した古い映像や写真と共に麻生の歴史と今を顧み、今後の麻生の住み心地をどんな風に改善してゆきたいか、ご一緒に考えましょう。なお、ナレーションは万福寺にお住まいの女優、音無美紀子さんが担当されています

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日　：５月１１・１８日（日曜日）　　６月７・１４・２１・２８日（土曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時